

原 著

# プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤とした ルーブリックの導入効果

An introduction effect of Rubric with project learning and  
a portfolio evaluation as a base.

前山 直美 石川 智子

Naomi MAEYAMA, Tomoko ISHIKAWA

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：母性看護学実習 指導と評価の一体化 プロジェクト学習 ルーブリック ポートフォリオ

## 要旨

[目的] プロジェクト学習とポートフォリオ評価、ルーブリック導入の効果と課題を明らかにし、母性看護学の臨地実習への示唆を得ることを目的とした。

[方法] 平成27年度母性看護学実習を履修した本学3年生で研究同意が得られた男性8名、女性71名の計79名（平均年齢 $21.4 \pm 4$ 歳）の形成評価結果を用いて分析した。

[結果] ルーブリック評価規準達成度の内訳は「関心・意欲・態度」86.9%、「思考・判断」78.2%、「技能・表現」80.2%、「知識・理解」76.1%とバランスよく実習目標が到達できた。

[結論] プロジェクト学習とポートフォリオ評価、ルーブリック導入効果は、主体的に学修するという習慣や動機づけの刺激、さらに学生の形成的評価に活用でき、到達目標の達成を果たすことができた。臨地実習へのストレスや不安は実習後も継続していることから、ストレス対処能力を強化できる教育方法の必要性が示唆された。

## はじめに

「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」<sup>1)</sup>に臨地実習に関する指摘内容と効果的な臨地実習方法がある。その詳細は次のように示されている。1. 卒業時の到達目標を達成するための臨地実習のあり方として、看護領域毎に看護過程を中心に行う臨地実習が効果的であるかどうか検討が必要である。卒業時の到達目標と臨地実習の目的の関連性や学ぶべき内容を明確にし、その目的が達成できるように柔軟に実習の場を開発し、実践的な教育を行うことが望まれる。2. 臨地実習では、実際に対象者の看護を行うことよりも看護過程の展開における思考のプロセスに重きを置いて指導することが多く、技術等を実践する機会が減少している場合が見受けられる。効果的な臨地実習の方法として、1) 実習場でしか体験できないことを確実に体験できるよう積極的に調整し、その後の振り返りを充実させること。2) 学生の自

律的な学習を促進するために、日々の学生の体験及び実践能力の習得状況を確認し、その学生の状況に合わせた関わり方をする必要がある。3) 実習の事前準備や実習中あるいは実習後に振り返りを行う。4) 体験した内容や獲得した能力を記載したもの（ポートフォリオなど）を活用することが効果的であると提案している。

ポートフォリオとは、学生の問題解決の過程や成果に関する資料・情報を目的的に、計画的に集積したもの<sup>2)</sup>で、学生がどのような豊かな体験をしているか、体験を通してどのような探求学習にとりくんでいるか等、看護に取り組む姿勢と努力を確認することができるとともに学生のよさや成長を見出せることができ真正の評価が可能となる。

真正の評価を行うには、現在実施している実習目標分析による評価や看護過程等の記録重視の評価を学生が看護していることを評価する視点の評価へと転換していく必要があると考えた。

一方、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための

受付日 2015年11月30日

受理 2016年1月28日

大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」では、学士課程教育の質的転換を促進・強化するために、育成する能力の明確化と学修成果の公平で客観的な評価の導入等が喫緊の課題として提示されている<sup>3)</sup>。

カナダやアメリカの学士教育に広く活用されているルーブリック評価は、公平性、客観性、厳格性を増大させるのみならず学習者への事前提示やフィードバックを通して形成的評価や協働学習支援に有効であるといわれている<sup>4)</sup>。また、学習活動や自己評価の指針としての役割を果たし学習課題を発見し、改善することに繋がる<sup>5)</sup>とされ、達成水準が明確になることにより「知識・理解」を問うテスト法では困難な「思考・判断」「関心・意欲・態度」「技能・表現」の評価に向くとされている。評価規準(criteria:学習活動に応じたより具体的な到達目標)と評価指標に即した評価基準(description:どの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴の記述)のマトリックスで示され、ポートフォリオと並んで注目されている。

以上のことをふまえた上で、平成27年度母性看護学実習方法を変更した。本研究では、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」で提案された効果的な臨地実習方法に準拠した方法で平成27年度母性看護学実習を実施し、指導と評価の一体化をめざし作成したルーブリックを用いて実習評価を行った。どのような卒業生を社会に輩出したいか本学のディプロマポリシーを意識した取り組みでもある。学生が自分の考えをもち能動的に学ぶ姿勢をもてることを目的としてプロジェクト学習とポートフォリオ評価、ルーブリック導入の効果と課題を明らかにし、母性看護学の臨地実習への示唆を得ることを研究目的とする。

#### 〈用語の定義〉

- ・プロジェクト学習とは、学生自身が母性看護学実習での学習をすすめるうえで、ビジョン(何のために)ゴール(何をやりとげたいか)を定め、目標達成するために自分の力で学びを進めていく主体的な学習。
- ・ポートフォリオ評価とは、対象に看護を実践する上で必要な知識や看護を語るうえで学修成果を収集したものをもとに個人能力の質的評価を行う。
- ・ルーブリックとは、実習での学習成果を評価する明確な基準。

### I 母性看護学実習概要

母性看護学実習の実習展開は、主に正常な母子1組を受け持ち看護展開している。実習施設は6ヶ所で年間分娩件数は約600～800件の総合病院である。実習期間は5月～10月で、その内2週間である。毎週金曜日は帰学日とし学内で教員面接、技術演習、文献検索やカンファ

レンスを実施している。4名～5名構成の全18グループで展開している。

### II. 母性看護学実習方法の変更点

#### 1. ビジョンゴールシートで実習戦略のコーチングを実施

実習の到達目標を「周産期にある女性のニーズに気づき、産後の回復に向けた援助と健康教育ができる」と具体的に設定した。そのうえで、今年度よりビジョンゴールシートを使って学生自身の目標を実習開始前に設定し、実習の準備を主体的に行うように指導を変えた。学生が一斉に受ける全体オリエンテーションは、母性看護学実習評価規準(学習活動に応じたより具体的な到達目標)と評価指標に即した評価基準(どの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴の記述)の理解と母性看護学実習の把握感を高める説明を行い学生自身の実習課題の明確化と学習計画の立案を支援した。臨地実習1～2週前に行われる実習直前オリエンテーションでは、学生自身の実習ビジョンの明確化と学生の学習計画の完成を支援した。実習ビジョンの明確化とは、ビジョン(何のために)、ゴール(何をやりとげたいか)達成するには何をするかの思考とその計画である。以上の活動内容を評価規準・基準に入れ実習評価項目とした。

#### 2. 実践を通して振り返り、自己の課題や成長を自覚できる実習(帰納的学修)

従来の実習記録を廃止し、日々の実習記録・情報収集・アセスメント・看護計画・追加学習に関する内容をノートに記載し実習記録とした。学生自身の学びについて成長エントリーシートや成長報告書に日々記載する方法に変更し、学びを焦点化した。

- 1) 実習記録ノート(B5サイズ横書き):受け持ち母子の情報、看護計画、毎日の看護実践の振り返り、学習内容など自由記載したノート。
- 2) 成長エントリーシート(A4用紙1枚):日々の実習での体験や指導されたことで学生自身が成長したと気づいた点や看護を実践する上で大事だと考えた内容であり毎日エントリーし記載する。
- 3) 実習内容一覧表(A4用紙1枚):毎日の実習内容と評価を記載する。
- 4) 実習成長報告書(A4用紙1枚):成長エントリーシートに記載された中から「あなたの成長ベスト3」をあげ、「実習で獲得した価値ある知」に整理し、それらを「どう活かすか」を記載し、成長報告書とする。

#### 3. ルーブリックの活用

母性看護学実習で何が達成されて何が達成されなかったかが明確にわかり、次のステップへ情報を共有するねらいでルーブリックを作成した。(資料1)

母性看護学実習で学ぶべき学習活動を抽出し、評価規準「関心・意欲・態度」(6)、「思考・判断」(8)、「技能・表現」(7)、「知識・理解」(2)の23評価規準から構成されている。うち19評価規準を〈必須〉とし、4評価規準〈状況で〉とし各到達目標である評価基準を3段階評価とし評価A(5点):十分に満足できる達成状態、評価B(3点):おおむね達成できる状態、評価C(0点):何も達成できない状態とした。

#### 4. ポートフォリオ評価

ポートフォリオ評価は、個人能力の質的評価方法とされ、結果だけでなく学習過程を重視する評価法であり、受け持ち母子の看護を实践する上で必要な知識や看護を語るうえで貴重な証拠物品や忘れられない価値ある大事な物をクリアファイルに集めさせた。形成評価の時間に説明させ客観的評価を行った。

#### 5. 形成的評価

形成評価とは、教育活動の途上でその活動が初期の目

的を達成しつつあるかどうか、どのような点で活動計画の修正が必要であるかを知るために行われる評価活動である<sup>6)</sup>。

第1週目帰学日は各施設の紹介、体験した看護の紹介、ポートフォリオ整理、ループリックを使用し教員・学生で中間評価と目標設定の確認を行う。理解が不足している部分は学生に対し補充的指導を行った。第2週目帰学日は看護の提言発表会を行い、学生の学びの共有を図った。

#### 6. 教員・臨床指導者による学生の思考を刺激するかわり

教員・臨床指導者の関わりは学生と一緒に考え、思考を刺激するメタ認知教師に徹することにした。学生が困ったり悩んだりした時は、学生のビジョンゴールシートの「どんな看護をしたいか」「受け持ち対象者にどうなってほしいか」の再確認を行った。ストレスフルな臨床実習環境でも学生が探索的学習活動と豊かな経験に繋げていけるように一定の距離を保ちながらかわった。

資料1. 評価基準

リフレクション:PF、ポートフォリオ:PF

学習活動	評価規準	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
				A(5点)	B(3点)	C(0点)
<b>全体オリエンテーション</b> 1. 母性看護学実習の目的・目標から自己の実習課題を明らかにし、学習計画を立案する。	関心 意欲 態度	母性看護の対象へ関心を示し、実習に向けて自己の課題がわかり学習の計画の立案をしている	目標管理シート PF	母性看護学実習に向けての自己の課題がわかり、学習計画の立案をしている。	母性看護学実習に向けて自己の課題が明確であるが、学習計画の立案が不足している。	学習計画の立案がない。
<b>事前オリエンテーション</b> 1. 母性看護学実習の目的・目標から自己の実習ビジョンを明らかにし、自己決定した学習計画の完成。	関心 意欲 態度	母性看護の対象へ関心を示し、実習に向けて事前学習の準備ができている。	目標管理シート PF	周産期看護に必要な知識・技術が学習計画にあり学習している。	周産期看護に必要な知識・技術が学習計画にあるが、学習が不足している。	学習計画の立案がなく、事前学習を行っていない。
<b>病棟の見学</b> 2. 病棟のオリエンテーションをうける。	関心 意欲 態度	入院中の母子の環境が母子の安全・安寧・健康促進に影響していると感じようとしている。	観察 PF PF カンファレンス発言	母子の安全・安寧・健康促進に影響する因子を2つ以上気づいている。	母子の安全・安寧・健康促進に影響する因子を1つ以上気づいている。	母子の安全・安寧・健康促進の環境づくりに気づいていない。
<b>看護の実践(必須)</b> 3. 周産期各期にある女性を受け持つ	関心 意欲 態度	周産期各期にある女性と家族の健康促進に必要な知識を深めている。	観察 PF PF 対話	受け持ち母子の看護に必要な学習と次の日の援助に必要な学習をし、実習に活かそうとしている。	受け持ち母子の看護に必要な学習をしている。	受け持ち母子の看護に必要な学習をしていない。
	関心 意欲 態度	周産期各期にある女性のニーズに気づきようとしている。	観察 PF 対話	受け持ち母子に関心を示し自分にできることを見つけ積極的に援助している。	受け持ち母子に関心を示し関わろうとしている。	受け持ち母子を理解するための行動ができず関わりを持とうとしない。

### Ⅲ 研究方法

#### 1. 研究デザイン：調査研究

#### 2. 研究対象者

本研究の研究対象は、平成27年度母性看護学実習を履修した本学3年生で研究同意が得られた男性8名、女性71名の計79名（平均年齢21.4±4歳）

#### 3. 研究期間：平成27年4月20日～同年10月30日。

#### 4. データ収集項目

##### 1) 受け持ち対象者の概要および見学内容

受け持ち対象者の概要は、対象者の年代、周産期各期の別、分娩様式、母子同室の有無とした。受け持ち新生児の概要は分娩週数、児出生体重、小児科入院の有無とした。見学内容は受け持ち対象者以外の見学を含めた内容である。

##### 2) 到達目標達成度

学習活動における「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の具体的な評価規準の達成度を知るために評価Aと評価Bで分析した。評価規準毎の達成度は〈状況で〉項目を除外し、到達目標達成度を分析した。

##### 3) 臨地実習に対するストレス感の程度

母性看護学実習の1～2週前に行なわれる直前オリエンテーション終了後と臨地実習修了後にアンケート用紙を配布し記入の依頼をした。「実習をストレスに感じているか（いたか）」に対し「まったくそうだ」（5点）から「まったくちがう」（1点）の5件法でアンケート調

査を行い収集した。

#### 5. 分析

基礎集計後の統計解析はExcel2010を使用した。学生の学びに影響する受け持ち対象者の概要および学生が見学した内容を抽出し単純集計を行った。実習到達目標達成度はルーブリック評価基準尺度を単純集計し、各評価規準の平均を求めた。実習前と実習後に感じる実習に対するストレス感の変化を分析した。

#### 6. 倫理的配慮

本研究は、2015年3月に神奈川歯科大学研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号第311）後に実施した。対象者には、事前に研究の目的及び方法、研究への参加は自由意思であること、また研究への参加有無が学業成績や単位認定に全く影響がないこと、個人のプライバシーは完全に守られていることを明記した文書で説明し、データ使用と公表の承認を得た。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 受け持ち対象者の概要

学生の受け持ち対象者の概要および学生が見学した内容を表1に示した。受け持ち対象者数142名であり学生が受け持つ対象平均数は約1.8人であった。少子化が進む状況で妊娠・分娩・産褥期にある女性の看護を1人以上受け持ち実施できたことは貴重なことであると考えられる。受け持ち対象者の年代は20歳代・30歳代が約90%を占めていた。

分娩様式では経膈分娩76%、帝王切開分娩24.0%、分

表1. 受け持ち対象者の概要

		(n=142)	
項目	区分	n (%)	Mean±SD
分娩経験	初産婦	71 (50.0)	
	経産婦	71 (50.0)	
年代	初産婦	10代	2 (2.8)
		20代	29 (40.8)
		30代	38 (53.6)
		40代	2 (2.8)
	経産婦	10代	0 (0)
		20代	14 (19.7)
		30代	50 (70.4)
		40代	7 (9.9)
分娩様式	経膈分娩	108 (76.0)	
	帝王切開分娩	34 (24.0)	
分娩週数(wk)			38.7±1.5
児出生体重(g)			3061±416
小児科入院	無	135 (95.0)	
	有	7 (0.5)	
母児同室	無	19 (13.4)	
	有	123 (86.6)	

娩週数は38.7±1.5週 (Mean±SD) 児出生体重は3061±416g (Mean±SD)、母児同室86.6%のことから、実習対象の選定条件を満たした対象者であった。

## 2. 学生が体験した内容

学生が体験した実習内容について表2に示した。胎盤計測、産後創部処置の観察、退院指導時の観察、分娩見学、分娩進行中の観察の他、様々な場面での保健指導の見学を行っていた。

## 3. 到達目標達成度

到達目標達成度について表3に示した。

〈関心・意欲・態度〉に関して母性看護学実習に向けて自己課題の明確化を図り学習計画の立案をした学生は59.5%であった。40.5%は学習計画の立案が不足という結果だった。周産期各期の母子や家族に対しての関心、意欲では受け持ち母子の看護に必要な学習と次の日の援助に必要な学習をし、実習に活かそうとする74.7%、受け持ち母子の関心を示し自分にできることを見つけ積極的に援助している82.3%、受け持ち母子の看護に必要な学習をしている25.3%、受け持ち母子に関心を示し関わろうとしている17.7%だった。

〈思考・判断〉に関して新生児の胎外生活適応過程を

正しく判断し、今後予想される状態を視野に入れた看護を考えられている学生が87.3%だった。一方、産褥期の回復促進の援助では、退行性変化を促すための看護計画を立案し援助の妥当性を評価し、より良い援助を探求している27.8%、看護計画を立案し援助の妥当性を評価している72.2%だった。母乳確立に向けた援助では、授乳

表2. 学生が体験した内容 (n=79)

項目	区分	体験数
胎盤計測		82
産後創部処置の観察		57
退院診察時の観察		55
分娩見学		51
分娩進行中の観察		44
NST装着中の観察と判読		57
帝王切開分娩の見学		5
保健指導	授乳指導	105
	沐浴指導	99
	退院指導	86
	妊娠中の個別指導	65
	産後1か月健診	31
	母親学級	23
	乳房外来	15

表3. 到達目標達成状況

〈関心・意欲・態度〉	評価A	評価B	達成度
母性看護の対象への関心を示し、実習に向けて自己の課題がわかり学習計画の立案をしている。	59.5%	40.5%	86.9%
母性看護の対象への関心を示し、実習に向けて事前学習の準備ができています。	43.0%	54.4%	
入院中の母子の環境が母子の安全・安寧・健康促進に影響していると感じようとしている。	84.8%	15.2%	
周産期各期にある女性と家族の健康促進に必要な知識を深めている。	74.7%	25.3%	
周産期各期にある女性のニーズに気づこうとしている。	82.3%	17.7%	
保健活動の目的を理解している。	63.3%	36.7%	
〈思考・判断〉	評価A	評価B	達成度
産後の回復を促す看護を考えている。	27.8%	72.2%	78.2%
母乳育児の確立に向けた援助を考えている	53.2%	46.8%	
退院後の生活を把握し、必要な育児能力・セルフケア能力獲得のために健康教育指導を考えている。	40.5%	58.2%	
母子の関係確立と家族関係再構築への看護を考えている。	31.6%	67.1%	
新生児の胎外生活適応過程を正しく把握し、異常の予防や早期発見の看護を考えている。	87.3%	12.7%	
周産期における保健活動の意義や看護職の役割を考えている。	36.7%	63.3%	
妊娠期にある女性の健康保持増進の看護を考えている。(*)	17.7%	3.8%	(*) 状況での項目
分娩期にある女性の健康保持増進の看護を考えている。(*)	17.7%	55.7%	
〈技能・表現〉	評価A	評価B	達成度
産後の回復を促す生活支援や健康教育ができる。	39.2%	55.7%	80.2%
母乳育児確立に向けた援助ができる。	67.1%	32.9%	
退院後の生活をイメージでき健康教育が実施できる。	39.2%	57.0%	
母子の関係確立と家族関係再構築の援助ができる。	43.0%	57.0%	
新生児の胎外生活適応過程を支える援助ができる。	77.2%	22.8%	
妊娠期にある女性が安全・安楽に過ごせる看護ができる。(*)	17.7%	3.8%	
分娩期にある女性が安全・安楽に過ごせる看護ができる。(*)	31.6%	39.2%	
〈知識・理解〉	評価A	評価B	達成度
母親の役割適応過程と母子相互作用の重要性がわかる。	31.6%	68.4%	76.1%
母性看護の特徴とその意義がわかる。	50.6%	48.1%	

※評価A：十分に満足できる達成状態  
評価B：おおむね達成できる状態

技術習得状況から健康課題を見つけ看護過程を展開しより良い援助を探求している53.2%、看護過程を展開している46.8%だった。退院後の健康教育指導等の援助の妥当性を評価できた学生は67.1%であった。指導の反応を評価し指導の妥当性を探求している31.6%だった。以上のことから学生は、看護過程の展開が十分でき援助の探求へ繋げられ思考できていたことが明らかになった。

〈技能・表現〉では約70%の学生が、今後の状態を視野に入れ新生児の胎外生活適応過程を支える援助技術である保温、栄養、感染予防、母子関係確立の看護を考え行っていた。また羞恥心を考慮しながら正しい授乳技術（抱き方、姿勢、吸わせ方）や乳汁分泌を促す援助を実施できていた。

〈知識・理解〉では、母親の役割過程と母子相互作用の重要性の意味を理解できていない68.4%、理論を用いて述べている31.6%だった。母性看護の特徴とその意義の理解は看護を具体的な体験から表現できた50.6%、看護を抽象的に体験から表現できた48.1%だった。

#### 4. 臨地実習に対するストレス感の程度

実習前・後に感じる実習に対するストレス感について図1に示した。実習前に感じる実習のストレス感を全く感じていない5.1%、感じていない26.6%、どちらともいえない30.4%、感じている21.5%、強く感じている16.5%であった。一方、実習後の実習ストレス感を全く感じていない11.4%、感じていない26.6%、どちらともいえない27.8%、感じている22.8%、強く感じている11.4%であった。以上のことから臨地実習前と臨地実習後に感じるストレス感の程度に変化はみられなかった。臨地実習を終了した3割強の学生は臨地実習に対しストレス感を持ち続けていることが推察できた。

## V 考察

### 1. ルーブリック導入効果について

今回、母性看護学実習にプロジェクト学習、ポートフォリオ評価やルーブリックを活用し形成的評価を実施した。ビジョンゴールシートで学生自身が実習に対する目標を定め、ポートフォリオで学習内容を記録していったことで、臨地実習に対する〈関心・意欲・態度〉86.9%、〈思考・判断〉78.2%、〈技能・表現〉80.2%、〈知識・理解〉76.1%の到達目標達成率であった。

ルーブリックの形成的評価によって学生・教員相互で学生の到達状況を正しく把握でき、次の実習活動に対する効果的なフィードバックを行い、学生・教員間の実習評価のずれは認められなかった。

臨地実習の場で学生は多くの緊張感や不安を経験しながらも看護師の職業アイデンティティを形成していることを理解し、教員と臨床スタッフは協働し支援していく姿勢が必要不可欠であると考え。しかし学生の臨地実習に対する意見に「記録が大変」「実習記録を仕上げるのに毎日徹夜をしている」という声を、毎年聞く。「やらされ感」満載で苦しいだけの臨地実習ではなく意味のある学習経験の内容で、どのように経験させ学ばせるかを思考した結果、平成27年度母性看護学実習変更点に記載した通り臨地実習記録を廃止した。学生はルーブリックの評価基準で何を求められているか、何をすればいいかを評価基準で確認して能動的に学びの姿勢を持つことができたことから到達目標の達成へと繋げていくことができたと考え。

ルーブリックで臨地実習のイメージ化の促進と目的をもって実習に取り組むことができるようになったと考え。すなわち自己評価と目標設定を繰り返し行うことによって「やらされ感」ではなく積極的に行動でき自ら考

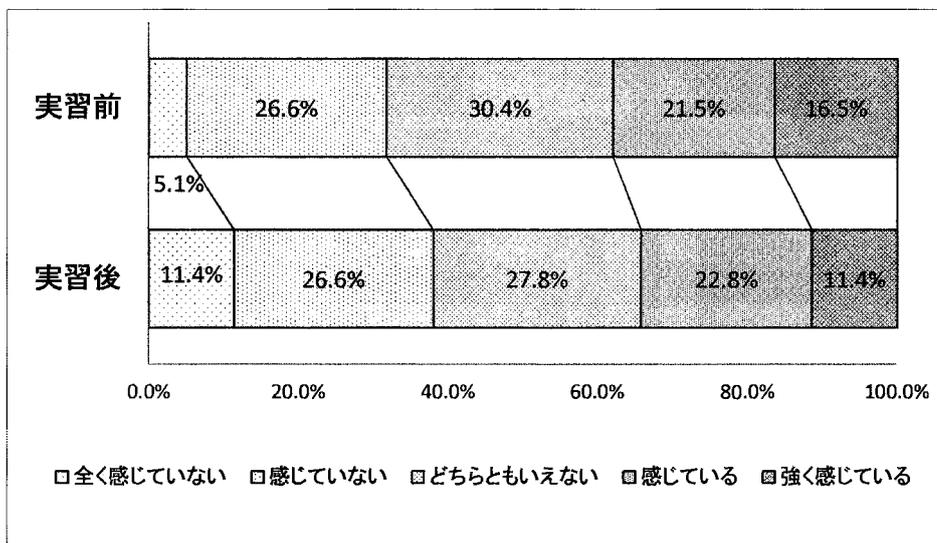


図1. 臨地実習に対するストレス感の程度 (n=79)

える力が育つものとする。今回変更した母性看護学実習は「指導と評価の一体化」に向けて臨床実習に関わるスタッフと一緒に取り組むことができた。学生と一緒に考える関わり、看護の視点を広げるメタ認知教師の役割を臨床スタッフの理解と協力で行うことができたことはルーブリック導入効果を促進したと考える。

〈思考・判断〉の評価基準はまさしく看護過程の展開を評価する内容である。従来の実習記録用紙を廃止し、実習記録ノートに変更した。固定された実習記録がなくても学生は十分に看護過程の展開ができていた。実習記録ノートで実習の体験から対象の看護について学生自身の考えに基づいて学習を整理することは、必要な学習過程であったと考える。さらに今までの実習記録には表現できなかった看護の振り返り（リフレクション）を実習ノートに加えることにした。東<sup>7)</sup>はリフレクションを思考のプロセスとして捉え、「リフレクションとは状況に沿った意図的な実践を行うために、一定の方法を用いて自己の看護実践を振り返り、実践に潜む価値や意味を見出し、それを次の実践に生かすことによって、さらに状況に沿った意図的な実践を行うためのプロセス」であるとしている。実習ノートに記載されたリフレクション内容は、常に流動的な状況に合わせて実践、考えて行動していく中で学生は様々な感情や思いに気づき、学生が行った実践を振り返りその意味や価値を真正の学びとして獲得していたものだった。このことは実践から学びを得る力をつけ、学生自身のかげがえのない成長を確かめ自覚できる働きをしてくれると考える。またこのようなトレーニングを積むことで困難なことが多い看護師の職業アイデンティティの形成強化へと繋がっていくと考える。

## 2. 受け持ち対象者の概要と学生の見学体験した内容について

2014（平成26）年の出生数は100.4万人であった。1人の女性が生涯に産むと推計される平均子どもの数である合計特殊出生率は1.42人と少子化の一途をたどっている<sup>8)</sup>。看護大学等の看護師養成校が急増し、看護師養成数は増加している一方で産科医療施設は減少<sup>9)</sup>しており、実習施設の確保は年々難しくなっている。本学の臨床実習施設は6施設と充実した環境で学生の実習が行われている。本学の受け持ち対象者の選定条件に外れることなく学生は実習ができていた。

母性看護学実習において妊婦・産婦・産褥は一時的を除けば日常生活はほぼ自立しており、自立そのものが目標である。妊産褥婦の看護援助はセルフケアが中心であり直接な看護ケアは少なく、指導や教育が中心となるため学生の援助技術は少なく観察や見学が主となることが多い。分娩時の観察や援助、帝王切開術の見学、授乳指

導はじめ周産期各期の保健指導の見学や子宮復古の観察など性器や身体に直接触れるケアを体験できたことは、実習施設および病棟責任者はじめ臨床実習に関わるスタッフの理解と多大な教育的配慮によるところが大きいと考える。

## 3. 臨床実習に対するストレス感の程度について

看護学生が看護専門職となるうえで欠かせない臨床実習は、看護の対象者との関係性の構築や臨床指導者はじめ多くの医療スタッフと連携し学ぶということであり多くの緊張や不安が伴うものである。臨床実習での緊張や不安は看護への関心や意欲の低下をもたらすと考えられる。母性看護学実習初日の専門的知識や技術に関する不安は、実習最終日に軽減する<sup>10)</sup>とあるが、本学では臨床実習を終えた3割強の学生は臨床実習後もストレス感を持ち続いていた。これはひとつの領域実習を終えても次の領域実習が控えており臨床実習に対しストレス感が継続されていると推察する。

先行研究で、ストレス徴候の出現で多いものは「気持ちに余裕がない」「漠然とした不安がある」<sup>11)</sup>であった。母性看護学実習を終えた後も臨床実習へのストレスや不安は継続している。このことから看護基礎教育において対人関係能力やコミュニケーション能力の育成のみならず、ストレス対処能力を強化できる臨床実習にするためにどのような教育をしていく必要があるか、学科内で検討していく余地があると考えられる。

## VI. 結論

母性看護学実習の指導と評価の一体化をめざし作成したルーブリックの導入効果と課題を実習到達目標との関連で明らかにした。

1. プロジェクト学習やポートフォリオ評価を組み入れたルーブリックは、学生の形成的評価に活用でき、看護師の職業アイデンティティの形成強化へと繋がる。
2. 臨床実習の指導と評価の一体化を図るには、臨床スタッフと教員間の連携と実習施設の理解・協力が不可欠である。
3. 本学のディプロマポリシーにある、社会に貢献できる質の高い看護職を育成する為に必要な主体的に学修するという習慣や動機づけにルーブリックが活用できる。
4. ストレス対処能力を強化できる臨床実習にするためにどのような教育をしていく必要があるか、課題が明確になった。

## 謝辞

本研究を行うに当たりご協力いただいた学生の皆様、学生の学びを深めるご指導ご協力頂いた実習施設の皆様に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書,  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/att/2r9852000013l4m.pdf>. 2014年7月20日
- 2) 山口陽弘：教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案 —パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して—, 群馬大学教育学部紀要, 62, p157-168, 2013.
- 3) 文部科学省：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申),  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm). アクセス2014年7月20日.
- 4) 沖 裕貴：大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—, 立命館高等教育研究, 14, p.71-90, 2014.
- 5) 文部科学省：ルーブリックとは, 2011年12月9日.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1314260.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1314260.htm).2014年7月10日アクセス.
- 6) ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 <https://kotobank.jp/word/A1-170807>. 2015年9月23日アクセス.
- 7) 東 めぐみ：看護リフレクション入門 —経験から学び新たな看護を創造する, ライフサポート社, p25-64, 2010.
- 8) 厚生労働統計協会：国民衛生の動向2015/2016版, 厚生労働統計協会出版社, p 59,2015.
- 9) 平成26年度版 看護白書, 日本看護協会出版会, 2014.
- 10) 荒川直子 木上静代 福丸洋子他：母性看護学実習における意識 (不安) とストレスの状況—成人看護学実習と比較して, 母性衛生, 43 (3), p.283, 2002.
- 11) 前掲載, 9).

著者への連絡先：前山直美 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部看護学科

TEL：0462-822-8774 FAX：046-822-8787

E-mail：maeyama@kdu.ac.jp